徳冨健次郎
徳冨あい 著

蘆花全集 第十八卷

富士

第三卷

昭和五年四月刊行

昭和五年四月十四日印刷
昭和五年四月十八日發行

非賣品

著作權所有者　德富愛子

發行者　盧花全集刊行會代表　佐藤義亮

印刷所　富士印刷株式會社

製本所　新潮社小石川製本部

盧花全集

第十八卷

發行所　新潮社內　盧花全集刊行會

東京市牛込區矢來町七十一番地（振替東京二七一〇〇）

電話牛込（八〇五番・八〇七番・八〇六番・八〇八番・八〇九番

富士第三卷

目次

富士（第三卷）（前承）……一
富士（第四卷）……一六五
年譜……一

口繪

著者自筆富士第一卷廣告文案……卷頭
著者自筆本卷三〇五—三〇六ページの原稿の一部……卷頭

挿畫

富士第四卷目次……一六六—一八七
櫻島に於ける著者のスケッチ……二三二
德富淇水書、送別詩……三七九
德富蘇峰書、別辭……四二五
德富久子書、送別歌……四三七
德富愛子書、記念寫眞題歌……四四二
聖地順禮の途に上る時の記念寫眞……四四三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

富士

第三卷（續）

第七章　社會主義

一

熊次は小說黑潮の第一卷を終へ、社には當分休む由を書き送り、七月一日から夏休の生活に入つた。其日に龍溪Y先生の「新社會」が出版された。

經國美談のY先生に隨喜した昔は遠い。明治二十二年の五月、熊次が熊本から東京へ歸參すると、兄が幹事をして居た文學會の例會が萬世橋のほとり萬代軒の二階で催されて、熊次は後でK新聞社員となつた飾磨君と紺縞に兵兒帶姿で席末に列したものである。逍遙、美妙、學海、篁村、碌堂其他燦爛たる文星の聚會の中に、窓下の椅子に紋付羽織袴ゆつたりと口鬚黑く、顏蒼白く、後飾磨君が其主宰の時務評論に書いたやうに、「滿場の文學者を小兒視して殿樣然と」構へて居る人がY先生であつた。兄に具せられて其前に一揖すると、Y先生は鷹揚に一禮した。食卓でもY先生は低いゆつたりした調子で饗庭篁村さんに松浦佐用姫の故事を問ふて居ると、篁村さんは恐れ入つた態度で何か答ふる狀が今も眼にある。翌年K新聞に熊次が初めて「石美人」の自由譯を出すと、Y先生は遊びに來いと人傳に言ふてよこされた。熊次は往かなかつた。其後「浮城物語」を出したり、新聞の隨筆に山陽の天草の

詩の「箋窓」を「芳草」に誤つて「芳草先生」の物笑ひになつたりして居たが、何時しか文壇に遠くなつた。其間にY先生は支那公使、宮内官と云ふ段取を經て、今閑散の位置に居た。先には青山御所前の懸崖上に危げな洋館を建てゝ居たが、何時の程からか熊次が住む原宿にY先生も住んで居た。原宿に越した當座、其處此處歩いて居ると、不圖名札を見つけ、

「あ、此處にYさんが居る」

と熊次は思ふたものである。熊次は南、Y先生は北、同じ原宿の其間五丁とははなれて居なかつた。然し熊次は一度も訪問しなかつた。「新社會」が出ると、早速讀んだ。Y先生は老いて居なかつた。依然先覺者であつた。Y先生の白日夢に現はれた「新社會」、それはおぼろげながら熊次の腦中に醞釀して居るものに似て居た。

熊次の同情は、昔から弱者敗者にあつた。十八の年、洗禮を受けた時、「少しも失はざるやうパンの屑を拾ひ集めよ」といふ耶蘇の言に感激し、世の屑と謂ふ屑を拾ひたい決心を以て受洗したものである。伊豫の今治に傳道師見習をして居た時分、場末の漁師町を覗き、不漁で頭からくされ蒲團をかぶつて寢て居る白髪頭の漁師や、收稅吏に鍋釜とられた家族を唯は見て居れず、叔母から借りた持ち合はせの二十錢で米や干鰯を買つて施したり、汚いおかみさんと握手したり、木綿羽織をぬいで裸の爺さんに着せたり、會堂に引張つたり、間歇的に色々やつたものである。

熊次の同情は虐げられるものにあつた。從つて婦人が先づ熊次の同情を惹いた。次には貧しい人々であつた。京都をしくじつて熊本に居た時、「爾が心の悲哀萬斛の泉、之を汲んで共に泣く者は誰ぞ」と婦人について書いた熊次は、また斯く書いた。

「ああわが不幸なる、あはれなる者よ。世は爾を虐げ、社會爾を捨つ。爾を扶くるの勇將は何處にある？　……爾が僕、彼は財を有せず、彼は名を有せず、彼が有するところは唯一枝の筆あるのみ。然れども爾が力の未だ足らず爾が訴の未だ競はざるに當つては、彼が持つ一枝の禿筆も亦寸效なきにあらざる可き歟。

上天願はくは爾が僕を祝し、爾の爲に斯筆を用ゐしめ玉へ」

東京に歸參して、受くる者、治めらるゝ者、使はるゝ者の立場に始終立つた熊次の同情は、自然日蔭者の側をはなれなかつた。日清戰爭終つて大元帥陛下の御凱旋を迎へて東京は國旗林立、萬歲の聲湧く中に、襤褸に繩帶の立ン坊の一人が、

「何でえ、車力なんざ如何するい？」

と低く叫んだ其聲は熊次の耳を貫いて、彼はいつまでも其？　を忘れ得なかつた。支那に勝つた。然し本當の憂は內にある。此不平、此不滿の輩も陛下の赤子だ。如何したら好いか？

熊次はまた新聞社に日勤して居た頃、日吉町の河岸で偶然眼に觸れた一場の光景を忘るゝ事は出來

なかつた。十五六の男の子、跣足で櫂櫓の、猿のやうな顏をしたのが向ふからやつた來た。唯見るといきなり弁箱の蓋をあけた。手を突込んで取り上げた竹皮包をあけて見ると、忽ち寒山拾得の笑顏を崩して、

「しめ――たア――しめ――たア」

片足がはりに足拍子をとつて踊つたものである。

熊次は惻然とした。斯樣なのが帝都に何の位あるか知れぬ。

如何したら好いか？

其當座熊次は芝の新網や四ツ谷の鮫が橋を歩いて、彼等の生活狀態を他所ながら知らうとしたものであつた。それは何等具體的產物を殘さなかつた。然し持つて生れた同情は、熊次のあらゆる成長と共に其自然の方向に生長せずに居なかつた。

維新の宏謨は、五ケ條の御誓文に盡きる。其第三條に何とある？

「官民一途、庶民に到る迄各其志を遂げ、人心をして倦まざらしめん事を要す」

一飢民、一不平子が日本にあらん限り、維新の大志は遂げられぬ。其志を遂ぐ可く、日本は皇室を奉じて第二の維新、總建直しを經ねばならぬ。名をつければ、社會主義、日本を擧げて一家族の實を擧げねばならぬ。去年「何故に余は小說を書くや」の中に、「一頓挫せる維新の風潮に鞭たんと欲す」

と書いた時、熊次は日本の總建直しを社會主義によつて斷行し、維新の精神を徹底させねばならぬと考へて居たのであつた。「黑潮」に人道の流れを高調した下心も、それに外ならなかつた。其黑潮の第一卷が新聞紙上に局を終るをさながらのきつかけに、先輩の「新社會」が出た。それが熊次を喜ばしたのは當然であつた。

二

日本は露西亞を忘れなかつた。露西亞も日本から眼をはなさなかつた。明治二十八年の春の三國干涉以來は、睨み合ひが搭鬪にうつるも、唯年月の問題であつた。明治二十四年の五月江州大津で日本の巡査に斬られた生疵のまゝ今の露帝ニコラス二世が皇太子として其起工式をした西比利亞鐵道は、長蛇の如くずん〳〵東へ伸びて來た。日本も師團を倍加し、せつせと軍艦を造り、西を見い見い双を磨いだ。熊次が「黑潮」を出しはじめた同年の正月に、日英同盟が公布され、帝都は交叉した日章旗とユニオンジヤツクの下に遼東還附以來の驩聲を揚げた。利捷い英吉利が支那を見限つて日本と握手した。光榮ある孤立を誇つた西の嶋帝國が、東の嶋帝國と進んで握手した。日本の爲には千人力の後楯である。英吉利がついて居る。日本は露西亞と人交へもせず鬪ふ事が出來る。日英同盟は日露戰爭の時期をぐいと間近に引寄せた。其勳功によつて、時の總理大臣太郎子爵は伯爵に昇叙され、壽太郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

外務は男爵に叙せられた。肥後寅一は帝國主義の旗幟押立て、其新聞を提げて一意時の政府を助けた。

日清戰爭後の寅一は、最早戰前の彼ではなかつた。世界一周前の彼で、洋行後の彼はなかつた。世界を廻つて白人の壓迫を痛感した彼は、藩閥の、薩長の、官の、民の、內輪喧嘩の小ぜり合ひをする時でない、國を擧げて一團となつて外に當らねばならぬ事を痛感した。半歲でも官場に居た經驗は、受身に立つ心得も學んだ。彼の執着と敵愾心は追々にとれて往つた。日清戰爭の結末に切齒して、彼は當局の春畝山人に喰つてかゝつた。七年後には彼の鄕國に來る春畝侯の爲に先棒を振る一人であつた。昔民黨吏黨の警語を造り出した彼は、政府の機關新聞として公然立つ事を恥ぢなかつた。彼は其報いを得た。現在の力に依る彼には、現在の力が宿つた。松隈內閣の最後に失脚した當分は、三年前に亡くなつた日清戰爭の智慧袋、日露戰爭の計畫者、知己の參謀本部長から金五百圓を融通してもらつて一時活版職工の給料を拂つた。此頃ふつつり社に行かぬ熊次も、其處には昔無かつた新しい印刷機の幾臺か据ゑられた事を知つた。ある時、逗子の夜話に、寅一は父に曰ふた。

「喃、阿爺（肥後の家では、皆が父を「おぢいさん」と曰ふた）あらたしか熊澤蕃山でしたなア、賄賂取つたつて好事ばする者な、爲ぬ者よりましてち言ひましたな」

父は深く思案する容子もなく、

「應」

と言ふた。熊次は默つて居た。

「曲りても杓子は物をすくふなり、直くて――何とか――つぶす摺子木」と云ふ歌を友山君はよく引く。友山君も兄も其點は同じで、共に力の福音の信者である。

「品性と「行狀」の別を、熊次は曾て寅一から懇々力說されたものである。惡く世間に云はるゝ人間も、惡い爲に頭を出すのでなく、好い點の爲に出世するので、善人もなまけて居ては物の役に立たぬ、とよく言ふたものだ。「正を踏んで恐るゝなかれ」のジョン・ブライトに昔共鳴した彼は、正義を眞向にふりかざす者を、「正義屋、正義屋」とけなす彼であつた。「正義屋が直ぐぐづ〳〵言ふ」「正義屋がうるさい」昔彼が攻擊した相手の位置さながらに彼は今居るのであつた。彼は碎けた。熊次は彼の變化を半信半疑の眼を以て見守つた。兎もあれ、人は自己をはなれて同情し得るものではない。昔ながらに弱者の籍に身を置く熊次は、力の側に立つ寅一との差が日に〳〵加はり行くを感じないわけに行かなかつた。「黑潮」の出はじめに、幼ない甥の埋葬など熊次が世話をした時、玄關に送つて帽子をとつてやつたり寅一がしたが、「黑潮」の第一卷が終る頃には、熊次はふつつり兄の家に足を遠くして居た。

去年の秋季皇靈祭の團欒を兄の不機嫌で散々にぶちこはした問題の女、嘉一郎が妹のおいとは女子高等師範の入學試驗を受けた。多分出來たと思ひます、と當人は云ふて居たが、結果は反對であつた。

行き處がなくなつたおいとを、社員の一人に妻はす事を叔父寅一は思案した。いふ言を聞かねば、最早構はぬ、と謂ふのであつた。相手は廣告專務の當間といふて、鴨志田君が豐後の佐伯から連れて來た青年の一人であつた。鴨志田君が社を出ると、當間君の心が二つに裂けた。鴨志田を離れねば社を出す、と社長に言はれて、當間君は鴨志田の子分を脫けた。今は廣告係で「何萬といふ金が當間の手から入る」と、今の親分は働き者にほめて居る。社長の姪をかさに被てはならぬと謂ふて、婚禮は叔母分の安子が手術の入院中に行はれた。「賣られたやうな」とおいとが言ふたと、駒子は驚いて熊次に告げた。熊次は船津の兄妹の中でも、此おいとが一番嫌ひであつた。しばらく彼女が原宿に居た間、熊次の機嫌は惡かつた。緣談はすべて他所事に見た。義姉の留守に駒子を本宅にやるなどは、堅く御免を蒙つた。母が當惑して、せめて花嫁つくりだけでも、と原宿に連れて來た。病院から義姉が駒子にたよりした。「今頃はペンキ屋さんで嘸お忙しいことでせう」白く塗られた花嫁は原宿を出て往つたが、やがて忘れ物を取りに使をよこした。それは駒子がやつた新しくはない木綿合羽であつた。熊次は顏をしかめた。翌日挨拶に來た新郎新婦は、芝に家を持つた。熊次の家の女中の妹が其家の女中に雇はれた。女客に汁粉を馳走し、鍋がもう空虛になつたを承知しながら、口ばかりはおかはりを强ひたりする新婦ぶりが、自然熊次夫婦の耳に入つた。ある時お糸が來て駒子に問ふた。紅茶を澤山もらつたのですが、如何したらしめらないでせう？　駒子は逗子で幸野の未亡人から聞き覺えの煎麥をいれて置

けば、茶はしめらぬといふ事を教へた。而してお糸さんの家にはそんなに困る程紅茶があるのか、と驚いたものである。うまい物好きの夫に馳走はしても、臺所は引きしめて居る駒子であつた。彼女はある時こんな夢を見た、廣々した邸に住んで、馬なども飼つて居る大名ぐらしをして、ふだん着に黄八丈の着物で居ながら、窃と戸棚の豚肉をへづつて置く夢を。

夏休の仕事に、熊次は舊稿の二三を輯めて、小冊を造つた。「角ぐむ蘆」と題名をしようかとしたが、「青蘆集」に落ちついた。「自然と人生」程氣乘りのした道樂仕事でそれはなく、云はば小使取りの仕事に過ぎなかつた。「甲州紀行はがき便」と「雨の水國」以外は、すべて二度目であつた。「零落」は逗子の末期にS雜誌の爲に書いた。呉れない稿料が氣になつて、東京に引出た後ある日ぶらりと神田のS社に往つて見たものである。S君に請ぜられて、澤山出版物を積んだ二階に上つた。丸髷の婦人が傍に子供を寢かして裁縫して居たが、會釋して罷つた。紺縞の羽織を被た色黑の青年がにこ〳〵して階段を上つて來た。それはS誌に元氣な文章を書いて居るB君であつた。文章で思ふたより餘程若かつた。面と向つては、熊次も稿料の事を言ひ出しかねた。店の出版物で御用のものは何なりともと云ふS君の言を幸ひ、T君の「故鄕」を一冊もらつて歸つた。其因緣つきの「零落」であつた。K堂から新に「文藝界」が出た。下半面を黑髯で埋めた主任の醒雪學士が懇請默止し難く、社外のものには滅多に書かぬ熊次も「慈悲心鳥」を書いた。拾圓の爲替がK堂から送つて來た。同封で版權讓渡

の證書に捺印を求めて來た。熊次は心弱く求めに應じたが、書店の辛辣なやり方を心外に思ふた。彼は無斷でそれを集中に採錄した。江見牧師の「新人」に熊次はしば〳〵書く可く催促された。其編輯の一人の大學生が「熊次さんは御在宅ですか」心易げな玄關の挨拶を、取次に出た女中は驚いたものである。癇に障つた熊次は、おきな叔母がみやげ話の一つを其まゝ書き飛ばした。それが「伴助七翁」であつた。卷頭の「五分時の夢」は黑潮の假名使ひなど正してくれた編輯のM君がほめてよこしたもので、卷尾の「吾初戀なる自然」は大阪の丸田君等が起した「小天地」に書いたものである。それには一つのウソがある。「十四の秋、江津湖の長堤に腰かけて、水の夕日を見て泣いた」と書いた。それは想像を詩化したに過ぎない。眞實は末節にあつた。

「余は猶小兒なり。余が耳目は未だ全く開けざるなり。余は見る事聞く事を未だ選擇し能はざるなり。自然と人生の學校に於て、余は猶小學の最下級に幼稚なる頭腦を働かし始めしのみ。十五にして學に志す、と古人は云ひしに、三十越して猶いろはに逡巡するは恥づ可きかな。然れども余は決して急がず、寸々歩みて、何時かは此小兒の吾をば弊衣の如く脫ぎすてゝ、正眼に自然を見、自由に人を愛する時あらん事を信ず」

これは熊次の本音であつた。「青山白雲」の序に、「願はくは己を虛ふし、赤子となりて、伏して造化の祕書の第一頁を披かん」と書いた其連續であつた。讀者の一人無名氏が熊次に書いた。「不如歸は

十八九、思出の記はせいぜい二十二三の人の作」熊次はそれを否む事は出來なかつた。彼は事毎に自己の貧弱さ幼稚さを感じた。彼の心は遠くを望んで、足は中々それに追つかなかつた。然し彼は自分が踏む道は決して誤まらぬと思ふた。行く道が道なれば、成熟は時日の問題で、到達は自然の結果であらねばならぬ。

思出の記の印税で社の提示に異議を申立てた熊次は、「青蘆集」でわれから一割を要求し、其提議は容れられた。十四行三十八字詰の二百二十四頁で、定價三十五錢であつた。それはあまり賣れなかつた。卷頭の「五分時の夢」にトルストイの俤ありなど見當違ひの評言やら、淺間の讃美を登山旅行家のU君にほめられた位で、格別評判にもならなかつた。「青蘆集」の豫告が出ると、熊本から東郭山人O君から期待の手紙をもらつた。Oさんは昔の小學校で二三級上の先輩であつた。沼山先生の友人東野先生には外孫に當る、高祿の家の生れで、雪のやうな白面、可愛い乳齒をした貴公子であつた。其人に手をとつて淸書をさせてもらつた時、九歳の熊次はうれし羞かしでわな〳〵震へたものである。西鄕戰爭からはなればなれになつて、熊次はOさんの消息を知らなかつた。しがらみ草紙に文藝評の漢詩を讀んだも大分前である。漢詩に長けた東郭山人の名は、人遠い熊次の耳にも自然に響いて居る。今は熊本に居て、五高に敎鞭をとつて居るさうな。去年熊次は不圖其人の手紙に接した。蘆花を一穗封入し、詩箋が二枚入つて居た。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co